

原判決を破毀して本件を富山地方裁制所に差戻す

[illegible]

弱を主張したものと解し得るから之に對する判断を示すのが裁判常識である。然るに原判決は漫然之を看過し判断遺脱の判決を爲したもので、この點に於て破毀を免れない。と謂い

辯護人高見之忠の上告趣意書二の要旨は、本辯護人は原審公判に於て被告人は犯行當時神経衰弱に罹り心神耗弱の状況にあつた旨主張したが、原判決はこの點に付何等の判断を示さなかつたから刑事訴訟法第三百六十條第二項の判断を遺脱した違法がある。と謂うにある。

〈要旨〉よつて案ずるに、被告人が犯行當時心神耗弱の状況にあつた旨の主張があつた場合には刑事訴訟法第三百六十條第二項に依り判決に於て右主張に對する判断を示さねばならないことは一點の疑いもないところである。而して原審第二回公判調書の記載を見るに「奈賀辯護人は（中略）被告人は當時連日の試験勉強の爲め神経衰弱に罹り居りたるものにして現在深く改悔し居るを以て、諸般の事情を斟酌して刑の執行猶豫の判決を賜りたいと辯論した」「高見辯護人は右と同趣旨の辯論をした」とありて、神経衰弱症の強弱の程度によつては刑法第三十九條第二項に所謂心神耗弱の状況にあつたものと認め得ることもあるので、兩辯護人が果して心神耗弱の主張を爲したか否か俄に判断し難くこの點に於て右調書の記載は前後の記載を綜合しても極めてあいまいなものと謂うことができる。かかる記載から見ると辯護人が期するところありて心神耗弱に付主張したか否か不明瞭な辯論をしたのが、或は明瞭に主張したが其の記載が不用意の爲めあいまいとなつたか何れか二者の中一つであるが、公判期日に於ける訴訟手續は公判調書にのみ依つて認ねばならない（刑訴第六十四條）右兩辯護人の主張は心神耗弱を主張したか否わ極めてあいまいであつたものと認むるの外はない。かかる場合原審としてはよろしく辯護人に對し心神耗弱を主張するか否かに付釋明した後若し之が主張を爲す趣旨であるときは判決に於て之が判断を示さねばならないもので、之を漫然看過した原審は審理不盡で其の判決は判断を遺脱し居りて事實の確定に影響を及ぼすべき法令の違反があるものと謂わねばならない。従つてこの點に關する右各辯護人の論旨よ理由があるから爾余の論旨に對する判断を省略し刑事訴訟法第四百四十八條ノ二に基き原判決を破毀して本件を富山地方裁判所に差戻す。

よつて主文の通り判決する。

（裁判長判事 世古件逸郎 判事 鈴木正路 判事 赤間鎮雄）